

賢者に学ぶ 1月7日付け産経新聞記事

てなま おむ

歴史の背後にあるもの 哲学者 適業 収

世界最高峰の物理化学者マイケル・ポランニー（1891～1976年）が哲学者に転向した理由は、「なぜ世界は不幸になったのか」を明らかにするためだった。

1935年、ポランニーは共産主義の理論派ハーリンにモスクワで会いショックを受ける。

テクニカル

その言動の中に、「機械論的な人間観や歴史観」（『暗黙知の次元』）を見出したからだ。

ナチスやソ連の全体主義は、自由を抑圧し、非道德的態度を貫いたが、ポラン

ニーはその根本に自由主義と道德主義が存在すると指摘する。

これはどういついことか？

うい

近代啓蒙主義は教会の権威を弱体化させ、実証主義および科学的価値の正当化を否定してきた。

ず

権威が引き摺り下ろされた結果、虚無主義が蔓延する。こうして懐疑主義は物

ニヒリズム まんえん

質的必然性を唱えるしかなかった。

一方、自由主義により伝統に裏打ちされた道德は崩壊したものの、キリスト教に起源を持つ道德的熱情や憎悪は消え去ることはなかった。

この両者が不幸にも結合したところに「新しい形の狂信」すなわち共産主義・全体主義が発生したのである。

彼らはどこで大きく間違えたのか。それを解明する鍵になるのが「暗黙知」という概念だ。

ポランニーは、「私たちは言葉にできることより多くのことを知ることができると言う。たとえば人間は、知人の顔とその他大勢の顔を区別する能力を持っている。しかし、どのようにして顔を見分けているのかは言葉に置き換えることができない。

このように意識の表面には上がらないが、「知る」という作用に背後で決定的な影響を及ぼしているのが「暗黙知」である。

ん

化学や心理学の実験データなど膨大な例証を挙げた上でポランニーはこう述べる。

「世に謳われた近代科学の目的は、私的なものを完全に排し、客観的な認識を得ることである。」(中略)

ナリッジ

しかし、もしも**暗黙的思考**が知 全体の中でも不可欠の構成要素であるとするなら、個人的な知識要素をすべて駆除しようという**近代科学の理想**は、結局のところ、**すべての知識の破壊を目指すこと**になるだろう。(中略)

近代啓蒙主義とは、**理性や明示的なものを信仰し、説明不可能なものを「迷信」と切り捨てる運動**であった。

科学的歴史法則が存在するなり、それに従うことが、「正義」となる。

その成れの果てに登場した「絶対的な知的自己決定」という発想が**地獄**を生み出したのは歴史を振り返れば明らかだ。

知は単なる情報の集積ではないし、人間理性には限界がある。

科学的記述でさえ社会的権威と信任に基づいていることを考えれば、ポランニーがエドモンド・バークに言及しながら、**節度ある自由、聖なるものに対する配慮**

を説いた理由がよくわかる。

保守的であること、**伝統を重んじる**ことは、**思想的哲学的にもっとも誠実な態度**なのだ。ポランニーは言う。

「**伝統主義**とは認識する前に、**まづに**言え、**認識**できるようになるために、**ま**
ずは信しなければならぬと説くものだ。するとまづや**伝統主義**は、**知識の本質**
や**知識の伝達**に対して**科学的合理主義**などよりも**深い洞察力**を携えているら
し」(中略)

知に対する浅薄な理解が「この道しかない」という**狂信**を生み出すのである。